

フェロシップ・ニュース

40

ダルク 25周年記念フォーラム 開催します！

テーマ「ダルクの流儀 - 回復の権利 The Right Of Recovery」

2010年8月18日(水)

場所：浅草公会堂(東京都台東区浅草1-38-6)

申し込み：不要

参加費：無料

10:00 オープニング ビデオ「ダルクの25年史」

10:30 講演「他機関連携の手法」土山希美枝氏(龍谷大学)

11:30 昼食

13:00 祝辞 田中康夫氏(衆議院議員)

13:30 シンポジウム「多様化していくダルク」

15:00 休憩

15:15 各ダルクからの活動報告

16:30 挨拶 近藤恒夫

17:30 終了

18:30 懇親会 浅草ビューホテル(東京都台東区西浅草3-17-1)

20:30 終了

懇親会に参加ご希望の方は次号でお知らせします。懇親会費5千円

【問い合わせ先】日本ダルク本部 03-3891-9958

日本ダルクインフォメーションセンター 03-3844-4777

特定非営利活動法人
アジア太平洋地域アディクション研究所

発行日
2010年5月1日

APARIとは、アジア太平洋地域アディクション研究所(Asia-Pacific Addiction Research Institute)の略称です。

全国のDARCやMACの各施設、福祉・教育・医療・司法関係者と連携しながら、依存症から回復しようとする方々を支援しているシンクタンクです。

目次：

ダルク25周年フォーラムのお知らせ フィリピンプロジェクト1年間の振り返り	1
第3回薬物依存症回復支援セミナーより…三浦陽二	2
刑務所講演より…町田政明	3
ドラッグOKトークプロジェクト…ト	5
入寮者からのメッセージ…獅子丸	6
藤岡ニュース!	7
アパリからのお知らせ	8

JICA & APARI フィリピンプロジェクト 活動を1年間振り返って

昨年5月に始まった本プロジェクトは、着実に一步一步進んできています。カウンターパート代表のリッチー氏のお陰で、昨年5月に行われたキックオフ・ミーティングでは各方面から様々な人たちをお招きし、幅広いネットワークを築けたことも大きな成果といえます。

マニラの貧困層の中で広げていくミーティングの名称を「アディクション・リカバリー・ミーティング」の頭文字をとり、ARM(アーム)と名づけました。この1年間で2カ所、計5回実施されました。

マリキナの会場は、公立のリハビリ施設内で第1金曜日、タタロンの会場は、タタロン・ラーニングセンターというNGO団体の施設を借りて第3木曜日に、それぞれ毎月1回開催しています。今後はどのように参加者を増やしていくかなど、参加者からのフィードバックを受けながら、更に充実したものにしていきたいと考えています。

また、JICAフィリピン事務所とフィリピン日本大使館には本邦研修に来日したフィリピン人コアメンバーのビザ取得に際して、大変お世話になりました。この場をお借りし御礼申し上げます。

前号にて「フィリピンプロジェクト緊急支援金募集!」をしたところ、多くの方々に献金をいただきました。ありがとうございました。引き続き支援金を募集したいと思いますのでよろしくお願いたします。

【郵便振込】 00170-0-616579 NPO法人アパリ

【銀行振込】 ゆうちょ銀行199店 当座 0616579

郵便振替口座が変りました。

龍谷大学・矯正保護研究センター 主催 DARS 協力

第3回薬物依存症者回復支援セミナー より 2010/2/21

「バーンアウト」前編

沖縄ダルク 三浦陽二

プロフィール

三浦陽二（みうらようじ）
46歳
1994年沖縄ダルク開設に
オープニングスタッフとして
就任。現在、沖縄ダルク エ
グゼクティブ ディレクター
として講演や病院メッセージ
など活動している。



DARS (Drug Addiction Recovery Support) は、2009年5月31日に東京の御茶ノ水で開催されたある研究会に集まった12人の男女が、薬物依存症者の回復支援のための担い手を育成しようと立ち上がった集まりです。

「良くなってもお前のおかげではないし、その代わり悪くなってもお前のせいではない。」と近藤（ダルク創設者）に戒められたことがある。

その頃の私はやっと薬以外に興味の持てる（薬を使い続けて刑務所や精神病院に入った事をプラスにひっくり返す）ダルクの活動と出会い、プログラムもそこそこにピンクの雲にでも乗ったように舞い上がっていたのです。そんな頃、出来たばかりの沖縄ダルクである事件？が起きました。近藤が留守の間の沖縄を私に任せ、東京へ出かけた時に入寮者3名全員がリラプス（薬の再使用）をしてしまったのです。留守を預かって気負っていた私は慌てました。今から思えば「使う使わないは本人の責任」だと思える事でも、当時の私にとっては自分に出来る事と出来ない事の区別が曖昧で...近藤に報告するのが辛かったのを覚えています。勇気を奮って電話をすると、怒られると思っていたのに「自分のやる事を精一杯やってダメなら、それは神様のせいだし、だいたい良くなってもお前のおかげではないし、その代わり悪くなってもお前せいではない。」と言われ、ほっとしたというか拍子抜けしました。

薬を使い、責任と言うものからは逃げ回ってきた私にとっては、取り合えず私のせいではないと言われた事で救われたのですが、仲間に対しても無力であることを認める事はまだ漠然としていたようです。言い換えると、仲間との距離感がまだ良くとれていないし、良くわからない状態であったと言えるのでしょうか。

今回は燃え付き(バーン・アウト)について書かせて頂いているのですが、この燃え尽きは「真っ白に燃え尽きた」のような完全燃焼について書かせて頂いているのではなく、自分が精一杯やった割には成果がでない事や認められない事でノイローゼになったりその仕事（ダルクのボランティアなど）からドロップ・アウトしてしまう事についての「燃え尽き」です。

ダルクのスタッフになったばかりの頃から最初の5年は、何度辞めようと思ったかわからないくらいでした。そしてその理由は確かに給料が少ないとか福利厚生がないとかいろいろ理由がありますが、その中でも多かったのは「やってあげてるのに」という、この活動を「自分のため」にやっているという事を忘れてしまった事によるものだったと記憶しています。

そしてこの「自分のため」というキーワードはこの活動を続けいくにあたり、とても大切なものとなっていきました。まずこの「自分のため」という呪文（一時期何かあると自分を落ち着ける呪文のように使っていました。）を忘れると、不満が多くなるのです。また「自分のため」と思っていると本当に良いのかわかりませんが我慢ができるのです。

薬物依存症者（自分を含め）と関わっていく上で回復とは何かを考える事は重要です。ここが間違っていると（何が正解かはきちんとはだせなくても間違いはわかると思います）燃え付きに至る過程での「自分が精一杯やった割には成果がでない事や認められない事」の成果が間違っているということなのです。そしてダルクに繋がりをさえすれば全員が回復に向かうという訳ではなく、その半数以上が施設の円満退寮を待たずに飛び出してしまうという時点ですでに成果を感じられない人も多いはずで

次号に続きます

刑務所講演より

「依存症と犯罪」 前編

ギャンブル依存ファミリーセンター
ホープヒル 町田 政明

はじめまして私ギャンブル依存ファミリーセンター・ホープヒルの町田と申します。今日は1時間ほどギャンブル依存症とは、ということで依頼されましてお話をします。

この病気は皆さん身近にあるいろんなものにはまった経験があるんじゃないかと思うんです。ゲームとか、ケータイにはまってるとか、人間って何かこうはまるというんですか、はまるって言い方をちょっと別な言い方をすると、とらわれるって言い方をしてもいいなと思うんです。皆さんも色々とらわれてることってあるんじゃないかと思うんです。

私がこのギャンブル依存症に関わるようになった話をすると長くなるのですが、アルコール依存症という病気に関わるようになってほしい30年くらい経ったんです。実はこの病気のことを全く30年前は知らないで、精神障害者のリハビリ施設に勤務していました。全く知らなかったもんですから、何とか私が回復させられるんじゃないかと、色々お話を聞いたり熱心に世話するわけですよ。

世話をするんですけど皆が皆ですね、定員68名くらいで、その中の50名くらいがアルコール依存症だったんですけど、皆再発して飲んで何回も契約書を書かせて、約束をしたり罰則を取り付けたりしても、また飲んでくるんですよ。それで結局3回も4回も5回も飲んでくるし、施設のプログラムに従わなかったり、帰ってこない人もいたので、結局皆追い出しちゃったんですよ。追い出しちゃった経験から、たまたま日本で初めて出来たアルコール依存症回復施設「みのわマック」というのが東京にありまして、その人たちの話を聞くことができたんです。そのとき横浜にも自助グループでAAといって「アルコホーリクス・アノニマス」という無名のアルコール依存症者の集まりなのですが、そのグループの存在や「みのわマック」という施設を知って、その職員の話を知っていると、アルコール依存症って病気は実は私はとんでもない誤解をしていたことに気付いたんです。意思を強く持てば何とかなるんじゃないかとか、まあ普通の考えをしていたわけです。ところがアルコール依存症というのは意志の力を使えない病気だということを聞いたのです。びっくりしました。よく自動販売機で、皆さんワンカップってご存知だと思うんですけど、買うつもりはなかったけど気が付いたらワンカップ買って飲んでたっていうんですよ。気が付いたら飲んでたってそれはないだろ、自分の意志で飲んでるんじゃないのって思ったんですよ。そしたらそういう風に言う人がたくさんいるんですよ。だからこれはなんだろうって思ったら、みのわマックとかそういった回復施設で回復してる人の話を聞くと、意思というものが使えなくなってしまう病気だということですね。気が付いたらというか、自動的に体がお酒の自動販売機を押すようになってしまっているっていう。まあ、そんなこと・・・って思ったんですけどね。

今日はギャンブルの話ですけど、ギャンブルの人はお話聞くとですね、吸い込まれるって言うんですよ。パチンコ店に。嘘だろうって。吸い込まれるなんて、自分の足で、自分の意志で行ってるんじゃないのって言ったんですけど。アルコール依存症の方の自動販売機の話、気が付いたら飲んでたって話を伺ったから、それがよく理解できるんですよ。実はかれらは体、脳も自然に細胞が酒を飲まなきゃいけない人、ギャンブルだったら、ギャンブルやらなきゃいけない人になってるんです。だからこの中でギャンブルが原因で犯罪を犯した方がいらっしゃるかもしれないですが、もう体と頭がギャンブル行かなきゃいけない人になってるって事です。これはアメリカではコンパルシブ・ギャンブリング (compulsive gambling) といって日本語に訳すと強迫的ギャンブルって言うんです。強迫的って言うのはちょっとこういうもの触ったら手を洗わないといけなとか、潔癖な人いますよね。ああいう人を考えてもらえばいいですね。ちょっとたったらもう行かなきゃいけない、だからギャンブルって事をちょっと思い浮かべたらもう行かなきゃいけない、そういう人になってしまっている。実はもういろんな脳のことがわかっていて、脳の中にドーパミンという気持ちいい物質が出るんですよ。それでどういうわけかギャンブル依存症になっちゃう人は体質的にはまっちゃう体質ですね、ギャンブルにはまっちゃう体質があるらしいですよ。それは、たとえば家族で同じものを食べているのに糖尿病になる人もいればならない人もいます。そういうたとえば同じ家族なのに血圧が高い人もいれば高くない人もいますという、みんな体質が違うんですよ。お酒をこれだけって言うのは変ですけど、例えば一生のうちどのくらい飲んでもね、大丈夫って言う人もいれば、飲んだらアルコール依存症になっちゃう、ギャンブル依存症になっちゃう。一回バーンというギャンブルで当たって、はまっちゃうって人もいれば、すぐにはならなくて、趣味でやってたけど退職後ずっと暇になっちゃってやる量が多くなって、はまっちゃうって人もいますし、みんなはまっちゃう量が違うんですよ。はまる人もいればはまらない人もいます。はまっちゃった状態が社会的な影響、家族に影響を及ぼしたり、ここで言えば犯罪を犯す、というようなことになるのはこれは問題なわけですね。やめたほうがいい。自分がギャンブルをやることによって人に迷惑を掛けたり、自分自身の生活が悪くなる。そういう人はギャンブル依存症だよって言うんですよ。やれば誰でもなる可能性があるわけです。誰がギャンブル依存症になるっていうのは分からない。これは立派な病気だということが世界保健機構 (WHO) や米国精神医学会でも認められている。ただ残念なことに皆さんこの病気を正しく知らないっていう。それでもがき苦しんでいて犯罪までいってしまう。

町田氏の原稿は、某刑務所での講演をテープ起こしし、要約したものです。

家族の体験記 好評販売中！

『ギャンブル依存症に悩む
家族の物語
～絶望から希望へ～』

この本には、ギャンブル依存症で悩む8人の家族の体験が綴られています。これは真実の物語です。家族の貴重な体験を知ることができる貴重な一冊です。

定価：1,000円
発行：ホープヒル
(アパリで販売中)

依存症の最後は刑務所か死って言っているんですね。アルコール依存症も薬物依存症もギャンブル依存症も行き着くところは刑務所か死。

ギャンブル依存症の人はお金とギャンブルにとりつかれている。特にお金にとりつかれている。皆さん覚えがあるかも分からないですけど、思春期の頃初めて恋をした時に、小学校か中学校の時にね、彼女の事ばかり考えて勉強も手に付かないとかそんな事ないですか？そうゆうふうにとりつかれているんです。それが依存症という病気なんですね。

もう他の事が、それ以外考えられない。ですから、あらゆる物を捨てていきます。仕事も捨てるし、家族も捨てるし、そして、その自分の人間さえ捨てちゃうんですね。もう人間としての生き方が出来なくなっちゃう。最後は自分の命、社会的な生命まで失っていく。非常に恐い進行性の病気なんですね。これにとりつかれて勝てる人は誰もいない。それほど恐い病気なんですけど、まだまだギャンブル依存症の事が知られていない。意志をコントロールできない、意志の力を発揮できない。だから今度はね、皆さんここに入ってですね、もう懲りた。ギャンブルしないよって言うかもしれないけど、またやります。間違いなく。ここでアルコールや薬物の問題で入った人でも必ずやります。やらなきゃいけない人になっちゃうんです。体がもう自動的にパチンコ店に入るようになってる。意志の力なんかでやめられるようなそんな甘い病気ではない。だから、意志でやめようって一生懸命努力したり、約束したりといった経験があると思いますが、意思の力でやめるといっては諦めて欲しい。

それはどうゆうことかっていうと、回復の話になりますが、自分の力を使わないって事ですね。私たちは自分を越えた力って言いますね。自分以外の力を使うと回復できるんです。何か難しい話になったなって思うかもしれませんが、要するに、散々ギャンブルで自分の生活が敗北していませんか？っていう、無力だったんじゃないでしょうか？自分自身何とかなるとか、今度はうまくやってみせるとか、そういった考えはこの病気では一切通用しません。まだそれが出来る人は病気じゃないです。自分の力でコントロールできるから。たぶん、ギャンブルの問題でここに来た人は、それができない人だと思います。出来ているんだったら犯罪なんて犯しているわけじゃないです。ですから、自分の力を使わない、じゃあ、どうしたらいいか？自分以外の力を使うんですが、自分以外の力っていうのは何かって言うと、同じ仲間。ギャンブルを止めたいという仲間に関行かないと回復しない。そして、その人に会うには、「ギャンブラーズ・アノニマス」と言って、アメリカでアルコールの治療で始まったプログラムがあるんです。これは1935年にボブとビルという人が出会って、話をしているうちにお酒を止められたわけなんです。ところが、それまではお酒っていうのは止められないものだっていう、お酒で狂った人は駄目だっと思われていたんです。アルコール依存症になったら死ぬ病気と。ギャンブルで狂ったらもうどうしようもないと思われていたんです。1935年にボブとビルが出会って、お酒をやめられた。これが世界中に広がるわけです。この方法というの、ここまで至るまでが大変だったわけです。それまでは、精神病院に入れたり、最高20年くらい精神病院に入れていられましたね。最終的には全部失って、自分も生活できなくなるから、生活保護を受けるんですけど、ケースワーカーも何回も繰り返すから、そういう人はすぐ5年コースっていうのをやらせちゃうんです。病院に5年も10年も入った人がですね、出てきたらすぐに飲むわけなんです。そうすると、また10年くらいずっと精神病院。精神病院に入れても治らなかった。

お酒を止められない2人の人が話をしていたらお酒を止められたっていう事で、この方法が日本中に広まっていくわけです。お酒を止める断酒会っていうのがこの方法を使った。ギャンブルもこの方法を使おうという事で始めたのがG Aと言いまして、「ギャンブラーズ・アノニマス」ですね。無名のギャンブル依存症者の集まりって訳したらいいんでしょうかね。この方法が世界中で効果がありましてお隣の韓国や日本でも使われております。日本には1989年に上陸しまして、20年くらいたったわけなんですけども、この地域にも確か週2回くらいミーティングがあるはずですね。自分の意思ではなんともならないのに仲間の中で話をしていたら止められるという不思議な力があるんですね。じゃあその中に何かあるのかって言うと、同じ止めていこうという仲間がいること、プログラムですね。皆さんはもう懲りたからって思うかもしれませんが、のどもと過ぎればなんとかでね、またすぐこの塀の外に出たら忘れちゃうんです。実はこれは忘れる病気なんです。あんなに痛い目にあってるのに忘れちゃうんです。たぶんギャンブルだけじゃなく犯罪もそうじゃないかと思えます。ここにいらっしゃる方は初めて入った方と聞いていますが、ここはもう人生の分かれ道だと思います。ここを出た後、

この病気を甘くみて今度は大丈夫なんて思っていたらまたやります。今度はここではなくて再犯のところがあるらしいですけど、そういうところに行くようになるでしょう。

何か犯罪者と依存症者の回復って結構似てるなって思ったんです。自分の生き方を変えないといけないんです。GAに行って何をするかっていったら、自分の生き方を変えるんです。自分の生き方を変えるってのはどういうことかって言うと、物の見方や感じ方、考え方を変えるわけです。たぶんここへ来た人たちは自分なりの自己防衛だと思うんです。全然擁護するつもりはないんですけど、自分なりに何かわからないけど歪んだ考えや物の見方で自己防衛してきたために、何か犯罪をおかしちゃった。僕は何かそういう風に考えてるんですね。たぶんその長い歴史、これを辿っていくと幼い子供時代までさかのぼっちゃうんでしょうけど、何か歪んだものを学んじやったかもしれない。不幸な子供時代を過ごしたのかわかりませんが、もうしょうがないんですね。生まれてきた以上はそこで生きるしかないんです。だから俺は何でこんなところに生まれてちゃったんだとか、いくら人のこといってもしょうがないんです。今自分を生き直さなきゃいけないんです。他人のこと言ってる間は生き方は変わらないですね。実はこれが僕が似てると思ったところなんですね。ギャンブル依存症からの回復もあいつが悪いとか、借金したからとか、外に原因理由を求めてる間は回復しないんです。

仲間の中で自分の生き方、自分の何が間違ってたかっていう、GAなどの自助グループには、12のステップっていうのがありまして、自分の生き方を変えるというプログラムです。先ほど言ったように第1ステップっていうのは自分がどうにもならなくなったことです。ギャンブルのおかげで犯罪まで犯した。ギャンブルに対して無力であり、生きることがどうにもならなくなったということを認めないと駄目ですね。そして自分以外の力を信じる、やっぱり仲間の力とか、12ステップのプログラムに身を任せて、自分が生きていくって事を決心しなければダメなんです。

そして自分がいかに間違ってたか、性格上の欠点ですね、これは4, 5ステップって言いますが、自分の性格上の欠点をもう一度見つめ直して、人に話していく。

そして、6, 7ステップっていうのがあって、8, 9ステップで、その埋め合わせっていうのがあるんです。だから皆さん、埋め合わせをしていかなきゃならない。そして自分がこうやって仲間の中で回復できたんだって、そしてそれをもう一人の人に伝えていくと、どういうわけかギャンブルが止まるんです。覚せい剤やお酒が止まる。自分でこの作業をやらないう限り止まらないんです。まだまだ自分の力というものを信じている限りはだめです。自分の力を全部捨てて新しい考え方や生き方を身に付けない限りは・・・。

次号に続きます

『ドラッグOKトーク』プロジェクト、ゆるやかにスタート ソーシャルワーカー コトー



アプリでは、若いドラッグ・ユーザーを対象に、『ドラッグOKトーク』プロジェクトをスタートします。ドラッグOKトークは、“ドラッグのこと、なんでも話してOK” という意味を込めてこのようにネーミングしました。

まずはホットラインをオープンします。若いドラッグ・ユーザーが、ドラッグに関することを気兼ねなく話せるような機会にできればと思っています。ここでは、使っているドラッグが何であれ、通報しない・説教しない・止めろと言わない、というのがポリシーです。今秋には、ウェブサイト・携帯サイトも開設する予定です。

ドラッグOKトーク：平日：月曜日～金曜日、昼12時～夕方6時

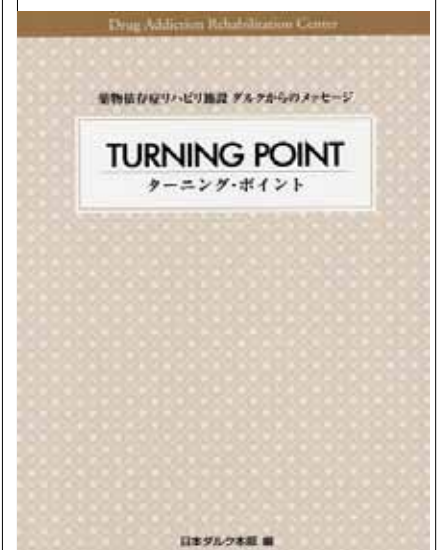
090-4599-6444

184を最初につけてかけると、あなたの電話番号がこちらに表示されることなく、話すことができます。



ターニング・ポイント

受刑経験のある
ダルクスタッフによる
最新の体験談
12名の体験談と漫画
体験記が載っています



1,000円

ご希望の方はご住所、お名前、電話番号をご記入の上お申込下さい。

FAX : 03-5830-1791

メール: info@apari.jp

アウェイクニングハウス 入寮者からのメッセージ

「新しい生き方」

獅子丸

書籍のご案内

拘置所のタンポポ

日本ダルク代表
近藤恒夫 著

目次

プロローグ のりピー、ダルクへおいでよ

第1章 絶頂からの転落～そして再起 わが波乱の半生

第2章 誰が、なぜ、ヤク中になるのか

第3章 あまりに知られていない覚せい剤の世界

第4章 なぜ薬物依存者は立ち直りにくいのか

第5章 立ち直るためにはどうすればよいのか

第6章 新生した仲間たち

発売：双葉社

定価1,400円（税別）

ご住所、お名前、お電話番号をご記入の上、下記のFAXあるいはメールにてお申し込み下さい。

FAX：03-5830-1791

メール：info@apari.jp

本題に入る前にまず、自分の過去の事を簡単に書きます。自分の家は今ではさほど珍しくない母子家庭でした。父親違いの弟と母との三人暮らしでした。自分が中学に入った頃初めてタバコの味を覚えました。母親は自分と弟にみじめな生活をさせない為に、麻雀店と飲食店を切り盛りしていました。そのお陰もあって、比較的貧しい家庭ではなかった様に思えます。喫煙に対してもある程度理解があって、「隠れてコソコソ煙草を吸って、ボヤや火事を起こされるのもゴメンだから、家の中で吸いなさい。」と言って母親が吸っていたセブンスターを毎日当たり前の様に吸っていました。しかも母親も店が忙しくて夜は殆んど家にはいませんでした。自然と不良仲間の溜り場となり、ごく自然に暴走族に仲間入りし、シンナーの味も覚えました。

17才になった頃、あるロックバンドに憧れ音楽に目覚め、暴走族も辞め、楽器や音楽に夢中でした。19才でバンド活動を始め、パンクロックやロックンロールを中心とした音楽に明け暮れた毎日がとても楽しくて、他の事など全く目も暮れず、1ヶ月に1度は都内のライブハウスで定期的にライブやイベントを行っていました。もちろん仕事もきちんとやっていました。高校は中退しましたが、肉体労働系の仕事は学歴もほとんど問われる事なく、労働時間も短いし、手取りの給料もそんなに安くなかったので、生活費以外の大半はスタジオ代や趣味に使っていました。

ある日違うバンドの人から大麻を勧められて、正直、「凄いなこれ・・・。」と思い、毎日ではなかったけれど週末などに売人から買って少しずつ楽しんでいました。

25才から35才位までの間は大麻オンリーでした。ライブが終わった後の打ち上げなどで結構酒も飲んでいました。しかし、年齢を重ねるに連れて徹夜の仕事やレコーディングなどがキツくなり、ヘトヘトに疲れる日も多くなりました。

ある時にいつものように10g単位で買っていた売人が、「サービスで良い物をあげるよ・・・。スッキリ疲れが取れるよ・・・。」と言って0.5gの覚せい剤を手渡されました。そういう物があるのは知っていたし、また使っている人も知っていましたが、なぜか覚せい剤だけは頑なに手を出さずにいました。正直、使い方もよく判らなかつたし、注射は嫌いなので、「要らないし、注射とか嫌だよ・・・。」と言って断ろうとしましたが、「ガラスのパイプもあげるよ・・・。これで吸うと良いよ・・・。」と言って覚せい剤と手作りのガラスパイプを貰いました。それまで大麻や大麻樹脂を吸っていたので吸引出来るなら使ってみようと思いき、早速使ってみたのですが、大麻の様な高揚感もなく、味もまずかったので軽くえずいてしまい、何度か使ってみましたが、これといって効果もないと思っていましたが、夜11時頃から始めて、気が付いた時は朝の8時になってしまっていて、「これは何だ?・・・。」と思い、時間の感覚も全く無く、おまけに一睡もすることなく、更に身体も疲れずにいて、その時初めて覚せい剤の効力を感じました。

それからというもの、大麻と覚せい剤を合わせて使うようになり、段々と覚せい剤に依存する様になりました。そうしていくうちに仕事にも行ったり行かなかつたりする事が多くなり、ある日の夜、職務質問を受け、持ち歩いていた覚せい剤の所持と尿からの反応で現行犯逮捕となり、執行猶予付きの有罪判決を受けました。その後は、もうこりごりだったので、1年以上大麻も覚せい剤にも手を出しませんでした。でも、新たに勤めた会社にも慣れてきて、以前と同業の職種だったので、徹夜仕事も多く、また覚せい剤を使うようになりました。

そして、38才の時に再び逮捕されてしまい、執行猶予中の身であった為、実刑となり、二刑持ちで刑務所に服役することになりました。合わせて2年10ヶ月の刑で服役し、約1ヶ月半位の仮釈放を貰い、家の事情で実家に帰ることが出来ず、保護会に満期までいる事になり、刑期を終えて都内の福祉事務所に相談に行った所、「DARC」という薬物依存を治療できる施設に行く様に促されて初めて横浜DARCに繋がりました。

取り組んでみて初めての頃は先入観を持っていたので、ミーティングにも積極的に取り組む気持ちがかかなり希薄で、新たな信仰宗教にでも入ってしまった感がどうしても自分の中から

払拭出来ずにいて、約1ヶ月間で施設を飛び出してしまいました。そして改めて福祉のケースワーカーに相談したところ、「もう一度だけチャンスを与えます。しっかり取り組んで下さい。」と言われて、群馬県内にある藤岡DARCに入寮することになりました。施設では同じ刑務所で服役していた頼りになる人がスタッフをしていて、連絡も取り合っていた経緯もあって、どうせ行くなら、全く知らない所に行くよりは少しでも知っている人の所へ行ってみようと思い、その施設に行く旨を伝えて藤岡DARCの門を叩きました。

いざ入ってみると規則等も厳しいですが、様々なプログラムに現在取り組んでいます。それにデイケアプログラムも同じ施設内で行われていて、自助グループのミーティング会場にも車で連れて行ってもらえる施設なので、「ここなら回復するプログラムに専念出来る・・・。」と思い、積極的に取り組む気持ちになりました。藤岡の施設はとても人数が多いです。当然それだけ人が大勢いると衝突もありますが、周囲の人達の助言もあり、何とかこなしています。

藤岡の施設の皆に受け入れられて貰い、日々感謝の気持ちです。プログラムで琉球太鼓や食事当番、フェローシップで様々なイベントがあったり、忙しいながらも毎日充実した生活を送っています。そして回復をし続け、もし社会復帰したら藤岡の生活を基礎として思い出し、薬物を使わない「新しい生き方」を実践して行きたいと思っています。

私は、今年で41才になりましたが、「人はいつからでも生き方を変えられる。」と思っています。

藤岡ニュース！

こんにちは、日本ダルク アウェイクニングハウスの山本です。4月に入りましたが、まだまだ山の上は寒い日が続き、体感温度は真冬よりも寒く感じます。そんな中でも、仲間たちは毎日太鼓の練習に励み頑張っています。さて、今回は皆様にお願いがあります。私たちは毎晩自助グループ（NA）へ通っていますが、そのNAの大きなイベント（コンベンション）が今年の8月20日から3日間に渡り、横浜で行われます。日本全国又は海外から、薬物依存症の仲間たちが集い、回復の喜びと経験を分かち合います。私たちの回復の中で、たくさんの仲間たちと触れ合いフェローシップを取ることはとても重要な意味を持ちます。この機会に、出来れば当施設でも全員を参加させたいと願っておりますが、参加費、交通費、宿泊費を含めると一人頭3万円弱かかる予定でいます。残念ながら、これらの費用を私たちで全て賄うことは難しいのが現状です。ですので、ここで皆様のお力を是非お借りしたいと願っております。どうか仲間たちが全員参加出来るよう献金のご協力をお願い申し上げます。

日本ダルク アウェイクニングハウス
ディレクター 山本 大

< 献金をいただいた方 >

高野茂様、牧野滋子様、鈴木繁雄様、藤原トモ子様、安田智和様、都筑義明様
沼田地区更生保護女性会の皆様、高崎地区更生保護女性会箕郷支部の皆様
渋川地区更生保護女性会の皆様、匿名希望の皆様 順不同

< 献品をいただいた方 >

竹本範文様、猿渡順一様、藤原トモ子様、三津田和行様、宗方涼様、佐竹様 順不同
匿名1名

ありがとうございました！！

【献金にご協力いただける方は同封の振込用紙をご利用ください。一部の方には封入を省略させていただきます。】

【郵便振込】00100-2-409942 日本ダルク アウェイクニングハウス

アウェイクニングハウススタッフ変更のお知らせ

3月31日付けで遠山芳章は退職いたしました。
5月1日付けで金子貴弘が新しくスタッフとして加わりました。
山本施設長含めスタッフ総勢5名の体制でやっていきます。

リカバリー・パレード

「回復の祭典」

リカバリー・パレード「回復の祭典」とは・・・

「依存症、精神障がい、生きづらさ」から回復している当事者本人、家族・友人、関係者、一般の賛同者たちで集まり、回復を喜び祝うパレードを行い、一般の人たちに回復の姿をアピールします。

[日時]平成22年9月23日（祝木）12:00～15:00 予定

[場所]新宿（新宿中央公園）12:00集合） 予定

[パレード概要]弾幕、のぼりなどを掲げて行進し、途中、琉球太鼓、コーラスを行います。詳細は今後準備委員会で検討していきます。

どうぞ皆さんご参加ください！

<http://recoveryparade-japan.com/>



特定非営利活動法人
アジア太平洋地域アディクション研究所

アパリ東京本部

〒110-0014
東京都台東区北上野2-2-2
電話：03-5830-1790
FAX：03-5830-1791
Email：info@apari.jp

アパリ藤岡研究センター

(運営：日本ダルク アウェイクニングハウス)
〒375-0047
群馬県藤岡市上日野2594番地
電話：0274-28-0311
FAX：0274-28-0313

【入寮条件】

- 1、薬物依存から回復・自立しようとしている本人
- 2、男性(年齢制限なし)

【入寮期間】

基本的に13ヶ月

【入寮費】

月額16万円 (初回17万5千円、生活保護の方も可能)



ホームページもご覧ください
<http://www.apari.jp/npo/>

発行者：近藤恒夫
編集責任者：志立玲子
平成22年5月1日発行
定価 1部 100円

<アパリの司法サポート>

《薬物事犯で逮捕された刑事被告人に対する支援》

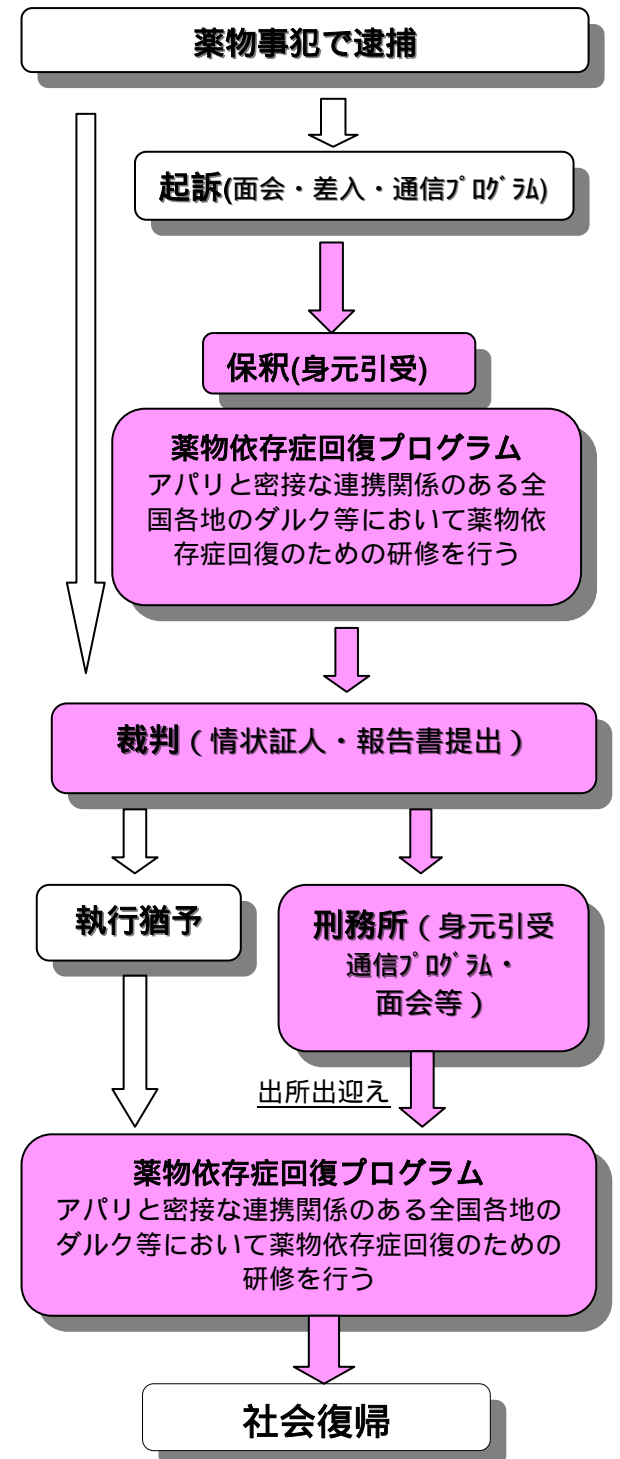
薬物犯罪で逮捕されたら刑務所に行くか、再犯防止に向けた何の取り組みもないまま執行猶予の判決をもらって、また薬物のある日常に戻るしかない日本において、**はじめて刑罰以外の再犯防止に向けた取り組みです。**

保釈中の刑事被告人に対する薬物研修プログラム、情状証人出廷、上申書作成、入寮契約、身元引受契約、出所出迎え、法律相談などあらゆるニーズにお応えします。なお、日本の覚せい剤事犯の再犯率は約60%ですが、アパリの司法サポートを利用された方の再犯率は**10%以下**です。最近では特に、**受刑中に身元引受契約をし、仮釈放又は満期釈放の時に**出迎えに行き、リハビリ施設に繋げるお手伝いをしています。

[費用：コーディネート料として一律20万円。但し、東京以外の地域は交通・宿泊費の実費が必要です]

【お問合せは東京本部まで】

アパリの支援



<アパリ・家族教室>

日時	テーマ	ファシリテーター
5月3日(月)	今困っていること	町田 政明
5月17日(月)	家族の落とし穴	町田 政明
6月7日(月)	いざという時どうするか?	町田 政明
6月21日(月)	薬物依存からの回復とは?	町田 政明
7月5日(月)	共依存からの回復とは?	町田 政明

【対象】薬物依存症などの諸問題を抱える家族、知人、友人、援助職従事者

【日時】第1・第3月曜日18：30～20：30(祝日も開催します)

【場所】アパリ・クリニック上野2階 【参加費】3,000円(2名の参加は4,000円になります)

【内容】ファシリテーターと家族との分かち合いを行います。【予約】不要です

<個別相談・カウンセリング>

【対象】薬物依存症などの諸問題を抱える家族・本人など 【料金】45分 9,000円

【場所】アパリ東京本部 【カウンセラー】町田政明(元神奈川立せりがや病院勤務、ホープヒル代表、寿アルク理事) 【予約】アパリ東京本部 03-5830-1790 【注意事項】当日のキャンセルや変更の場合は全額いただきます。